

## 2025年の図書館状況とフィクションの中の多様な事例

日本語日本文化学科 教授  
佐藤 毅彦

1. はじめに
2. 公共図書館の事例
  - 2-1. 『図書館に火をつけたら』
  - 2-2. 『まるみかん大一番』
3. 学校図書館の事例
  - 3-1. 『その本はまだリユールされていない』
4. 大学図書館の事例
  - 4-1. 『麦本三步の好きなもの 第三集』
5. おわりに

### 1. はじめに

2025年5月に実施された、静岡県伊東市長選挙では、前市議の田久保氏が現職を破って当選、選挙の公約で新図書館の建設中止を訴えたことが話題となった。結果を伝える新聞記事では、「選挙戦では新図書館の建設の是非が争点となった」。「南北に延びる伊東市では、一カ所の大きな図書館建設に不満を持ち、物価高に直面する市民に響いたとみられる」などと報道された。1)

図書館整備への「反対運動」については、桑原芳哉の研究<sup>2)</sup>が発表されるなど、すでに一定の存在が確認されているが、自治体の財政状況の悪化などにより、図書館を取り巻く環境も、よりいっそうきびしくなっていると考えられる。

図書館に対する「逆風」とでもいふべき事象が表面化する一方で、社会における実効性の点から、図書館の存在意義を証明したとする研究成果が発表された。<sup>3)</sup> 図書館の本が多いまちほど、健康長寿の傾向がある、という関係が確認されたとの研究成果が、新聞で報道され、図書館への公共投資が健康長寿のまちづくりに有効であるとの方向性が示唆されることになった。

2025年、図書館をめぐる、上記の事例に代表されるような、多様な方向性からの言及が存在する中で、フィクションの作品で扱われる図書館にも、現実を反映したさまざまな実態が描かれている。図書館員のキャリア形成、非正規雇用、新たなコンセプトに沿った図書館建築、図書館施設の廃止・統合、多様な利用者と利用形態、など、これまでのフィクションの中で扱われてきた内容も含まれているが、2025年には、よりいっそう多様な観点から図書館を扱った作品が発表されたと言えよう。

注

1) 『朝日新聞』 2025. 5. 26

田久保氏は、「図書館の必要性は認めつつ、分館を視野に計画の見直しを訴えた」とされる。

その後、学歴詐称問題などが発覚し、市長を退任、再選挙には田久保氏も出馬したが、ほかの候補者が当選することとなった。

2) 桑原芳哉「図書館整備「反対運動」とその争点」CA1834、『カレントアウェアネス』No. 322、2014. 12. 20

3) 新聞報道では、たとえば、『産経新聞』で、「図書館や図書館の蔵書数が多い自治体ほど、その自治体の要介護高齢者が少ないことが慶応大と京都大の統計調査でわかった。図書館が多いと、要介護者が少ないという相関関係が確認され、図書館や蔵書の充実といった文化財への公共投資が、健康長寿の街づくりに有効である可能性も示唆する結果となった。調査グループは「財政難で公共サービスが削られる現状にあるが、図書館の有用性を改めて見直すきっかけになれば」と報じられた。

「図書館が多い街ほど要介護者も少なく 高齢者 7 万人の 7 年間追跡調査で判明」『産経新聞』 2025. 5. 28

研究機関のプレスリリースとしては、次のものがある。

「図書館の本が多い街ほど健康長寿の傾向 蔵書が人口当たり 1 冊増えると要介護リスク 4%減に相当」慶應義塾大学・京都大学 『JAGES プロジェクト』Press Release No. 464-25-9 2025 年 5 月

この件を扱った論文としては、以下のもの。

Otani, S., Sato, K., Kondo, N. Public libraries and functional disability: A cohort study of Japanese older adults. *SSM - Population Health*, 29; 101762 (2025). <https://doi.org/10.1016/j.ssmph.2025.101762>

## 2. 公共図書館の事例

### 2-1. 『図書館に火をつけたら』1)

衝撃的な書名が注目を集めた本書は、文庫オリジナル作品として刊行された。本作を紹介している『神戸新聞』の記事で、「1989 年、兵庫県生まれ」「三木市在住」とされる著者の貴戸湊太は、図書館関係の専門書を精読し「作品の真実相当性を担保した」としている。2) この記事の最後では、「作中の図書館は、「小さな山の中ほどにひっそり」と建つ場所から「市街地のど真ん中」に移転した。「作者が幼少期から慣れ親しんだ、三木市の図書館事情と共通する部分が垣間見える」とされている。3)

### ◎事件の舞台 七川市立図書館

「千葉県七川市。人口約六万七千人。千葉県北部に位置する地方都市」(架空の地名)

で、秋の暮れの十一月初旬、午後六時頃に、「その町の、市街地のど真ん中で図書館は燃えていた」。ここは、「三年前に山の中から移転し、最先端の美しい建築に変わった」(p. 14) 「三十五万冊超もの蔵書を有する図書館」(p. 25) であった。

#### ◎新しいコンセプトの図書館

かつて「七川市立図書館は、小さな山の中ほどにひっそりと建っている、三階建ての大きな建物」で、「横に広くて、窓が多い」ところだったが、山の中から市街地のど真ん中へ「現館長と市長、肝いりの政策」で移転し、「綺麗な建物」で「屋根は螺旋状になっていて」「館内も自然光をふんだんに取り入れて明る」い施設となった。「来館者は多」くなり、カフェが併設され「親子連れに人気」となった。(p. 47)

事件の捜査に当たる、刑事の瀬沼貴博の同級生で、図書館の女性正規職員(島津穂乃果)によれば、「古くてアクセスしにくい山中にあった従来の図書館に代えて、新しい図書館をアクセスの便利な市街地に建て」た。館長のつてで「有名建築家が指揮を執って」「光が燦燦と降り注ぐ奇抜な螺旋状の屋根を持つ構造は、テレビでも取り上げられ注目を集め」「館内にはカフェを併設し、蔵書も三十五万冊という数を揃え、開かれた新しい図書館をアピールした」。「メディアに何度も取り上げられたことで、以前とは比べ物にならないほど大勢の利用者が訪れ」た、という。

#### ◎新図書館の館長

図書館長といえば、「年配の人を想像しがちだが」、七川市立図書館長は「若々しくてスマートな感じの人物」(p. 23) である。尾倉章宏館長は「四十七歳ながら、革新的な図書館運営を行っているとして、たびたびメディアに取り上げられ」「名刺にも、メディア出演歴や書籍の出版歴が細かい文字でびっしりと書かれている」。(pp. 28-29)

女性正規職員の島津穂乃果によれば、尾倉館長は、「もともとは七川市出身の会社経営者で、実績のある人」だが、「会社経営はもう辞めたと言い、これからは社会のためになる事業を行うと宣言した」(pp. 56-57)。「そこに目をつけたのが今の市長」で、「市長は図書館の運営方針について長らく不満を抱いて」いて、「館長や職員が意見するせいで、市長の思い通りにならない」ので「市長は尾倉さんを館長として雇う予定を立て、彼との関係を深めて大改革の計画を立て始めた」。館長は「司書としてだけじゃなく、上司としても最悪」で、「司書資格のある正規職員を大量に解雇し、その分非正規職員を雇ったせいで、ノウハウの伝達ができていない」。正規職員は二名だけで、「日々の業務に忙殺されて、非正規の人たちに指導などしている時間はありません」(pp. 60-61) という。4)

さらに島津穂乃果は、「経営の手腕は認めます」。「就任後の人口に占める来館者の割合は県内でトップだし、貸し出し率も県内トップどころか関東、全国でも上位クラス」であることについて、館長の手腕を一定程度評価している。(p. 57) 5) 一方、「明るい光が差し込む建築」は、「まぶしく、また蔵書が色焼けする可能性」があり、「建築に

お金をかけた分、スプリンクラーなどの設備は不足」し、「整備不良を繰り返して」いる。(p. 58) また、館長は「利用者を効率よく増やすべく、長居の禁止なども命じて」いた。「図書館は居場所のない人が穏やかに過ごせるシェルターのような場でもある」が「長時間の利用者に声をかけざるを得ない」といった状況にもふれている。(p. 59)

#### ◎利用者のプライバシーに関する扱い

この問題に関して、女性職員の島津穂乃果は、館長の対応について、以下のように批判している。尾倉館長は新たに、「先進的な事例として、利用者の貸し出し記録を保存し、ネットで自分のものを閲覧できるサービスを始めた」。「原則として公共図書館の貸し出し履歴は、返却後まもなく削除するというのが通例」で、「読書はその人の思想・信条に大きくかかわるので、秘密保持は徹底されないといけない」。「予約本が届いたと利用者宅に電話をした際、本人以外の家族が出た場合、絶対に署名を教えないというほど、その意識は徹底して」いる。「館長は、他館で先進的事例として進んでいるという理由だけで、貸し出し情報の保存を決めてしまいました」。「流出対策をきちんととれば有効な試みかも」知れないが、「館長は急いでこの試みを実施したので、明らかに準備が足りていません」。「館長がこんな、司書ならしないことをしてしまったのは、司書資格を持っていないからです」。「実は図書館の館長になるために司書資格は必要ない」「法律がそう決めているんです」。(pp. 59-60)

図書館の火事の原因について捜査する際に、警察から、ある「人物の貸し出し記録を知りたい」と問われた館長は、「承知しました。当館は貸し出し記録を先進的事例として保存していますので、お見せすることも提出することもできます」とこたえる。島津穂乃果は、「貸し出し記録を部外者に見せるのはやめてください」と、「図書館の自由に関する宣言」の「図書館は利用者の秘密を守る」という条項をあげ、「どんな本を読んだかは、思想・信条にあたる重要な情報」で「みだりに他人、ましてや捜査機関に提示するものではありません」と主張するが、尾倉館長は、「業界の宣言に過ぎないものを守って、捜査に協力しないというのもどうかと思うな。情報提供をする方がよほど良心的だろう」と発言する。(pp. 89-91)

捜査にあたった刑事の瀬沼貴博は、小学生だった頃、当時の図書館の司書に教えてもらった「図書館団体は、職員が貸し出し記録を令状なしで漏らす刑事ドラマに異議を唱え続けており、ドラマのその回が欠番になるなどの影響が出ている」ことを思い起こした。(p. 90) 7)

#### ◎七川市立図書館非正規職員 加賀美

図書館が火災で焼失した原因について、島津穂乃果は、「内部犯ではないか」「図書館の運営方針に不満を抱いている職員は多くいました」。図書館の職員には「非正規のものが多く」「その面々も含めてほとんどが不満を持っていました」という。非正規職

員で、「加賀美さんという三十代の男性職員」がいて、「優秀な司書」だが、「少しおっとりしているところがあって、館長や副館長にもよく叱られている」。「彼は利用者に優しく評判もいい」が「館長や副館長はスピーディーでないと彼のことをいつも怒鳴っていて」「事件の数日前には、加賀美さんはこっそり地下書庫の中で泣いていました」。「管理職が現場を知らなさすぎるのが良くない」「館長も副館長も、カウンターに立って貸し出しをするようなことは一切なく、利用者との距離が遠い」「部屋にこもらず、開館中の館内の様子ぐらいは見て回ってほしい」としている。(pp. 61-63)

ストーリーの後半で、図書館に火をつけた人物は、この非正規職員の加賀美であったことが明かされ、尾倉図書館長は、「よくも「俺の図書館」を燃やしてくれたな」と言うが、加賀美は、ふざけるな、図書館はあんただけのものじゃない、と反論する。

加賀美は、「俺が怒っていたのは、図書館を金儲けの場所にし、誰かの居場所であることをないがしろにしたこと」で、「館長たちは利用者の回転率を上げるべく、長居の禁止などを命じていた」。「図書館は、居場所のない人が安心して過ごせる場所なのに、それをだめにした」。「命じられて、長時間の利用者に声を掛けていた俺の気持ちがかかるか。図書館が居場所であることの大切さを誰より知っていた俺の気持ちが」と証言する。(pp. 259-260)

#### ◎図書館非正規職員 ホームレス・羽場博之

この火事で亡くなってしまったのが「羽場博之、四十六歳。無職のホームレス」であった。警察の捜査の結果、羽場は「元図書館司書」で、「七川市立図書館では働いていませんでしたが、近隣の市の図書館で」「非正規での雇用」で勤務していた。「十五年ほど司書をして」いたが、「非正規ゆえに月収十四万円ほどと金銭的に苦しく、結婚はしたものの離婚」し、「一人息子の親権は妻」に。「羽場は司書の職を愛して」いたが、パートをしていた「専業主婦志向の妻」は「稼げる職についてほしいと願っており、離婚前には口論が絶えなかった」。「離婚後、羽場は気が抜けたようになりミスを連発。勤めていた図書館を自主退職するまでに追い込まれ」「その後数年でホームレスになった」という経歴をたどっていたことが明かされる。(pp. 124-125)

七川市立図書館職員の岡林は、羽場とは大学の同級生で、「共に司書課程を受講」し、「将来図書館で働くならどうしたいかとよく語り合っていた」。「私が図書館の正規職員になった一方で、彼は非正規の職にしか就けませんでした」。愚痴を聞くこともあったが、次第に疎遠になり、ここ十年は音信不通だったという。半年前に電話で、助けてくれと言われ、「職をなくし、妻子にも逃げられてホームレス状態」になっていたと聞かされた。七川市立図書館で雇ってくれないかともいわれたが、岡林には、そんな権限はないので断ると、それ以降は連絡がなかった。七川市立図書館に親しみがあつたので、地下書庫に住み始め、火災の被害に遭ってしまったのではないかと思われる。(pp. 142-143)

羽場が残したメモには、「司書をクビになって収入が途絶え、妻からは離婚を言い渡

された。息子の親権も取られて絶望した私は、気力を失ってホームレスになった。だが、司書へのこだわりを捨てられず、岡林に採用の仲立ちを依頼するが断られ、せめて本のある空間で死を待ちたいと、岡林のいる七川市立図書館を住まいに選んだ」とあった。(p. 154)

#### ◎焼失後の展望

その後、スプリンクラーの故障が放置されていたこと責任をとって、館長・副館長は辞職し、仮設図書館がつくられる。(p. 271) 室内にはテーブルや椅子が多くあり、ゆっくり休めるようになっていて、壁の貼り紙には「ぜひ長時間のご利用を」と長居を進めるものまであった。(p. 273) 男性の正規職員・岡林が館長代理となり、新しい図書館のテーマは「伝統と革新の調和」で、山の中にあった旧図書館と、市街地にあつて焼失した図書館の中間の位置、街中から離れすぎず近すぎずの場所につくられた施設では、旧来の長居できる環境の復活や、正規職員を増やして働きやすさの改善もはかれる。カフェの併設や蔵書量は継続して検討することになった。(p. 275)

#### ◎図書館をめぐるさまざまな思い

従来の図書館運営や図書館職員に満足できない市長が、図書館に関する専門性を考慮せずに、外部から図書館長を迎え入れ、カフェを併設した、建築家の斬新な思想による施設を建設するといった事例は、すべてはあてはまらないにしろ、たとえば、武雄市をはじめとするCCC運営の図書館を想起させる部分もある。また、本稿の「5. おわりに」でとりあげているが、新築の図書館施設は石川県立図書館などをはじめとして、雑誌などのメディアで紹介されている例は一定数、存在する。一方、職員については、非正規雇用が増加し、その継続が困難になってホームレスに転落するという本書の「羽場博之」のような展開も、あながち荒唐無稽とばかりいえないものがある。

巻末には、参考文献として、図書館関係の専門書や司書課程のテキストとして使用されている図書があげられており、現代の図書館現場の実態に基づいてストーリーが構想されている。正規雇用の図書館員を即刻解雇するという対応は、現実には困難と思われるが、正規職員を図書館から異動させる、退職者の補充をしない、などの措置により、10 数年前から、図書館の正規職員数が減少しているのは事実である。

この図書を紹介している新聞記事でふれられていた、三木市図書館の例のように、市街地の再開発の核として、図書館が中心市街地に移設される例は全国で展開している。また、CCC が運営にかかわる図書館では、スターバックスコーヒーが図書館の中に出店していることも話題となっている。単にそうした状況をストーリーにそのまま取り入れるだけでなく、新しい施設への批判的な見方や、図書館の職員や従来からの利用者など、図書館に関係を持つ人たちの割り切れない思いなども、ストーリーに生かされている。図書館関係の専門書や図書館協会のホームページなどを参照して、最近の図書館に関する事情を作者が消化したうえでストーリーに反映していることが見て取れる内容にな

っている。

注

1) 貴戸湊太『図書館に火をつけたら』宝島社（宝島社文庫）、2025. 2

同書のカバーで、貴戸湊太は、「1989年、兵庫県生まれ。神戸大学文学部卒業。第18回『このミステリーがすごい!』大賞 U-NEXT カンテレ賞を受賞し、『そしてユリコは一人になった』で2020年にデビュー」とされている。

本書の末尾（p. 285）には、参考文献として

スーザン・オーリアン著、羽田詩津子訳『炎の中の図書館 110万冊を焼いた大火』早川書房、2019

塩見昇編『図書館概論 JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ 1』日本図書館協会、2018

中井孝幸・川島宏・柳瀬寛夫・共著『図書館施設論 JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ 12』日本図書館協会、2020

眞野節雄編著『JLA Booklet no. 6 水濡れから図書館資料を救おう!』日本図書館協会、2019

が掲載されているとともに、

「\*その他、日本図書館協会ホームページなど多数のインターネットサイトを参考にしています」

と記載されている。

2) 「図書館の密室 謎の行方は? 三木在住の貴戸湊太さん 新作ミステリー出版」『神戸新聞』2025. 2. 16、p. 10

「今作の舞台は図書館」「捜査を担当する切れ者刑事は真相を探っていくうち、偶然旧友と再会。子供の頃の、図書館への思いと記憶がよみがえっていく」と紹介されている。

また、「参考文献として、スーザン・オーリアンの『炎の中の図書館 110万冊を焼いた大火』や、司書にとっての必読書『図書館概論』『図書館施設論』などを精読。作品の真実相当性を担保した」とされている。

3) 三木市図書館は2015年7月1日に、新たな施設に移転し、「斜面を利用して里山を生かした設計」「図書スペースの大きな窓からは木々の緑が一面に広がり、『まるで森の中で読書をしているみたい』と好評」であることが報告されている。出典は、以下のとおり。

伊藤真紀・三木市立中央図書館長「移転開館を迎えた三木市立中央図書館」『兵庫県図書館協会会報』、No. 107、2015. 10. 1

4) 公務員である「正規職員を大量に解雇し」「非正規職員」を雇う、というのは、現実的ではないが、ここでは、尾倉館長の正規職員に対する不穏当な処遇を強調するために、このような表現が選択されたかと思われる。実際には、図書館の正規職員を図書館以外

の部署に異動させる、図書館の正規職員が停年や個別の事情などで退職した際に後任の正規職員を補充しない、などの対応により図書館現場から正規職員が減少している状況は、20 数年間にわたって継続してきている。

5)「貸し出し率」という指標は、『日本の図書館』などの統計でも、使われていないが、ここでは、「貸出利用が多い」といったことを表すために使われている表現かと思われる。貸出点数を人口で割った数値は「貸出密度」といわれ、図書館の貸出利用状況を知るための指標の一つとして使われている。

6)実際の図書館の座席に関して、利用希望者が多い図書館で、レファレンス(参考調査)室・学習室など、机付きの座席では、一日をいくつかの時間帯に分けて、交代制で運用する対応がとられている。図書館現場の閲覧席で、職員がひとりひとりの利用者について、利用開始時刻をチェックして、利用時間を測定し、「長時間の利用者」を見分けて「声をかける」のは困難であると考えられる。近年は、座席の利用について、web から予約可能なシステムも導入されている。

7)たとえば、2004年12月に放送された、テレビ朝日『相棒』の「夢を喰う女」の回では、DVDやシナリオ集に収録されないという対応がとられている。

## 2-2. 『まるみかん大一番』1)

タイトルの「まるみかん」は、「丸美市立みんなの図書館」のこと。ストーリーの中心である、松谷研心は相撲が好きであり、図書館の閉館に反対する活動について、相撲になぞらえて「大一番」と、しているものと思われる。

### ◎「まるみかん」閉館のお知らせ

二学期の始業式の放課後、小学校六年生の松谷研心が「丸美市立みんなの図書館、通称『まるみかん』」へ行くと、掲示板に、「丸美市立みんなの図書館閉館のお知らせ。長年みなさまに愛されてきたみんなの図書館ですが、二〇二五年三月をもって閉館することになりました。閉館後は丸美市役所そばの丸美市立図書館をご利用ください」「これまでのご利用に感謝いたします」と出ている。(pp. 3-5)

研心は、相撲が大好きで、大相撲の本場所をテレビで見たり、おこづかいで相撲雑誌を買ったりしている、ちょっとした相撲オタクで、去年からはブログに大相撲のことを書きはじめた。場所中には新聞も読むが、新聞によって書いてあることがちがうので、スポーツ面を読みくらべるとおもしろい。「ネットでだって少しなら新聞を読めるけど、途中から有料になるのが難だ」。「市立図書館本館はたしかにおおきくて、資料は充実しているけれど、電車かバスに乗らないとたどり着けないところにある」ので、これは、こまると思った。(pp. 5-8)「まるみかん」にはふつうの日刊紙だけではなく、農業新聞や工業新聞などの業界紙といわれるものもある。(p. 13)ということで、図書館の廃止・統合によって、市内に図書館が存在しなくなるわけではなくても、不便を感じるようになる利用者があることにも言及している。

一方、研心の同級生には、まるみかんの建物は古くてあぶない、「図書館なら本館の方が蔵書も多いから、お母さんの車に乗って行けばいい」「『まるみかん』はちょっと使いづらいよ。なんていうか、雰囲気が悪いんだよね」。「図書館の席は、いつも同じ人が占領してるって話だ」。「うちの兄さんが新聞を読もうとしたら、常連さんがひとりじめにしていたって」「公共の施設なのに、常連の人が幅を利かせているってのがおかしい」と考えている子どももいた。(p. 78) まるみかんの建物に関しては、研心も「鉄筋コンクリートの建物にはあちこちにひびが入り、くすんだ灰色でところどころしみも浮いている」し、「やっぱ古いなあ」と感じていた。(p. 34)

#### ◎「まるみかん」の館内

丸美市立図書館の分館である「丸美市立みんなの図書館」、通称「まるみかん」は、「赤ちゃんから大人まで、幅広い人たちが使えるようにいろんなジャンルの本やDVDが置いてある」。「建物は三階建て。一階は本が置いてある図書室。ここには閲覧コーナーと読み聞かせ質がある。二階がCDやDVDがある視聴覚室。雑誌、パソコンも置いてあり、マンガ本コーナーもある。そして最上階の三階は学習室で専門書のコーナーもある」。「一階の入口を入ると左手に司書さんがすわっているカウンター」で、「カウンターの右側が閲覧コーナー」。「六人用の机と椅子が二組」あり、「ちょっとした調べ物をしたりすることもできる」。「閲覧コーナーの三分の一ほどが読み聞かせ室」で、「外国の童話に出てくる小さな家みたい」「中はカーペット敷きで、靴を脱いで入る」ようになっている。(pp. 10-12)

#### ◎住民投票

研心は、弁護士の勉強をしている東山さんが「住民投票で、この決定をひっくりかえします」。(p. 24) 「『まるみかん』みたいにみんなに関係のある施設の閉館のような大きな決定は、住民が直接自分たちの意思をしめすことができる」などと言っていたと聞いて、住民投票について調べることにした。(p. 47)

研心は、担任の松野先生からも、先生が大学生の時に、実家のある町で、となりの町との合併の話が持ち上がった時に、住民投票をしたところ反対票が多く、一つの町のままだることになったことを聞く。住民投票は条件次第では子どもも投票することができるけれど、そういう条例を作ってもらわなければならない。(pp. 25-26)

東山さんによれば、住民投票を行うには、有権者の50分の1以上の署名を集めて、市長に提出し、市長が市議会に提案して、可決されると住民投票が実施されることになることだった。(p. 51)

#### ◎「はるみかん」閉館反対運動の関係者

##### ○エリナさん

エリナさんは、「『まるみかん』でアルバイトをしている、ブラジル生まれの親切な

お姉さん」(p. 14)である。エリナさんも住民投票について調べていて、勉強会を開く予定になっているので、「一緒に勉強しましょう」と、研心も誘われる。(p. 40)まるみかんについての児童集会では、自分が子どもだったころからまるみかんに通っていたという体験をもとに、廃止に反対する発言をしている。(pp. 218-220)

#### ○東山幸作さん

カウンターで、閉館について問い合わせている男の人は「常連の一人」で「いつも学習室で勉強をしている人」だ。司書の人と「はい。私どもも、……はり紙のとおりとしか、お答えのしようが……」。「こんな重大なことが説明なしに決定されたなんておかしいですよ」というやりとりをしていた。カウンターの奥から出てきた「白髪頭で小柄なおじいさん」の館長にも「大事な通告をあんな紙一枚ですませるなんて、民主主義に反していますよ」と言うと、館長は「奥で話を聞きましょう」と対応する。(pp. 16-18)閉館に反対していたこの人は、東山幸作さんという利用者で、弁護士になるための勉強中とのこと。(p43)その人の話では、図書館のような施設の閉館という決定には、住民が意思を示すことができるという。(p. 47)「署名をあつめて議会に住民投票を行うための条例をつくってもら」必要があるが、「署名には代表者が必要」で「できればみんなが知ってる人がいい」と東山さんはいう。(pp. 51-53)

#### ○山本緑さん

「あのはり紙はどういうことでしょう」「あんな話お聞きしておりませんよ」と館長室に入っていった人がいた。この人は、図書館で読み聞かせをしている「『お話の森』のリーダー」「山本緑さん」だった。(pp. 53-55)「有権者の署名の代表者」は、この山本緑さんに決まった。「けっこう有名人」であり、「元々はテレビのアナウンサー」で「読み聞かせの活動も長年やって」いるという人で「一緒にがんばりましょうね」と言っていた。(pp. 89-91)ところが、活動をしていくなかで、山本緑さんは「署名活動の代表をやめたい」と言ってきた。研心たちとその話をしている途中でスマホに連絡がはいり、それは市議会議長からだった。この議長が「まるみかん」と周辺の土地にショッピングモールを誘致していて、そこにカルチャーセンターを作ってそのセンター長に山本緑さんがなる、という話が出ている、と反対運動にかかわっている人が発言する。(pp. 105-109)

#### ○谷原涼子さん

「いつも研心の向かいの席で新聞を読んでいる白髪頭の眼鏡をかけたおばさん」が、谷原涼子さんだった。(pp. 42-44)山本緑さんが、代表をやめたいと言ってきた時には、「権力者におもねったんでしょう。あの人はそういう女よ」「あの人は昔からそうなの。なんだかんだうまいこと言っておいて人を使うくせに、最終的には人を切りすてて自分の利益を選ぶのよ」と発言している。(pp. 108-110)谷原さんは、研心が相撲にはまるきっかけとなった『土俵に花まる』の作者であるプロのマンガ家で、山本みどりさんがやめた後の代表になる。(pp. 112-115)

## ◎意見交換会 模擬投票

松谷研心は、小学校でまるみかんの閉館に反対する人を増やそうと、児童委員会に話をしたが、「閉館に賛成する人と反対する人が、その理由を言いあって、みんなにそれを聞いてもらったほうがいい」と言われ、児童集会で、賛成と反対の意見交換会をして、そのあと、賛成か反対かを投票して、その結果を市長さんへ提出することになった。

(pp. 81-85)「小学生の意見には法律的な効力はないが、意見表明は禁止されていない」ということだった。(p. 89)

児童集会にそなえて、研心たちは、まるみかんの閉館に反対する理由をいくつかあげていき、相撲の番付になぞらえて、もぞう紙を使って壁新聞を作成した。前頭、小結、関脇、大関、横綱、の順に項目を設定して、それぞれについて、担当者を決めて、ひとりずつ発表した。賛成派は、動画を作成してスクリーンに投影し、新しい街のイメージ図を示して、ショッピングモールを紹介した。新しい場所が、まるみかんの古さを際立たせているようであり、模擬投票でも閉館に賛成する意見の方が多くなりそうに思われた。

ところが、山本緑さんが、まるみかんの前のイチョウ並木を、伐採はしなくても移植させてその場所を開けることもありうる、という提案をすると、賛成派だった、研心の同級生の女子が、「やっぱり、『まるみかん』閉館には反対で」す。「『まるみかん』には友だちとの大事な思い出があるから」と発言する。(pp. 216-217)会場はしーんとなり、意見交換会は終了した。

このあと、児童による模擬投票が行われ、反対票が多数を占めた結果が、丸美市役所に報告される。(p. 248)さらに丸美市議会で審議され、住民投票の条例が制定される。この投票に関しては「市内の小学生たちが署名運動を展開し」たことで、「条例で十歳以上の投票が認め」られることになった。(pp. 257-258)

住民投票の結果、まるみかんの廃止に反対する意見が多数となり、半分以上が「丸美市立みんなの図書館が必要だと感じた」ことを示唆する結果だった。「『まるみかん』は新しくできるショッピングモールに入ること」になった、という。(pp. 264-266)

ところで、新しくできる「ショッピングモールに『まるみかん』が入れるように働きかけたのは、山本緑さんだった」という。それを聞いて谷原さんは「あの人もたまにはいいことするのね」と、ちょっと見直したみたいだった。(p. 267)

実際に図書館の施設の老朽化や耐震基準をクリアするために、それまであった図書館施設を廃止したり、複数の施設を統合して集約するという対応は、現実にも行われている。それ自体は、やむを得ない事情によるケースもあるが、『まるみかん大一番』の中にも出てきたように、従来使っていた施設よりも遠く、アクセスが不便になる、などの理由で反対意見が表明されている例もある。2)

## 注

1) まはら三桃『まるみかん大一番』小学館、2025

「まるみかん」は、「丸美市立みんなの図書館、通称『まるみかん』」のこと。ストーリーの中心である、松谷研心が相撲が大好きで、テレビ観戦したり、図書館で相撲関係の本を読んで調べたりしていること図書館閉館への反対運動について、「大一番」と位置付けているんものと思われる。

表紙カバーには、「図書館の閉館をふせぐために、ぼくたちにできることはなんだろう。『まるみかんを守る会』の大一番が始まる」と記述されている。

本書の裏表紙カバーで、「まはら三桃」は、「1966年、福岡県北九州市生まれ。2005年、講談社児童文学新人賞佳作を受賞し、その後デビュー。2011年には『鉄のしぶきがはねる』で第27回坪田譲二賞を受賞した」「福岡市在住」とされている。

「まはら三桃」の著作に、学校の図書室を舞台とした作品を集めた短編集『ぐるぐるの図書室』に掲載されている『やり残しは本の中で』がある。2006年にデビューした5人の児童文学作家がデビュー10周年を迎え、それぞれが執筆した作品が収録されている、この短編集の巻末の座談会で、まはら三桃は、「私は現実取材して書くことが多いので、まず間違ったこと、不正確なことは書けません。でも、現実を引き写すだけでは成立しないのも確かなんです」(p.229)と発言している。

工藤純子、廣嶋玲子、濱野京子、菅野雪虫、まはら三桃『ぐるぐるの図書室』講談社、2016

2)この件に関しては、たとえば、以下の論考が発表されている。

片山善博(大正大学地域構想研究所所長)「図書館閉館の是非をめぐる事例を通して地方議会改革、住民自治の拡充を考える」

([5a8f63eada224538e20ad85366f27db8.pdf](https://www.researchgate.net/publication/352453820))

片山善博「図書館閉館問題から見えてくる自治体のモラル欠如 日本を診る 187」『世界』2025.6

著者は、鳥取県知事、総務大臣、慶応義塾大学教授、早稲田大学公共経営大学院教授、などを歴任している。

### 3. 学校図書館の事例

#### 3-1. 『その本はまだルリユールされていない』1)

学校図書館に勤務する「中島まふみ」を中心とするストーリーで、彼女が居住するシェアハウスの大家さん(綺堂瀧子・瀧子親方)は、製本工房をいとなむ製本の職人である。「ルリユール」については、本文中の、この人物の発言の中で「フランス語で『手仕事の製本』という意味よ。『もう一度~する』という意味のre-〈ル〉と、『糸で綴じる』という意味のlier〈リール〉を合わせて、Relieur〈ルリユール〉」「あたしたちの工房では針と糸を使った手仕事で、丁寧に上製本を作ったり、古い本の仕立て直しをしているの」説明とされている。(p.28)

◎非常勤の司書 中島まふみ

中島まふみ、は「明正大学法学部」（架空の大学名）を卒業して以来「非常勤の派遣司書として首都圏の図書館を転々としてきた。今は千葉の松戸にある公立図書館に勤めているが、その契約期間もこの三月まで」（p. 8）で、四月からは「出身小学校の学校司書に配属」（p. 6）されることになった。

その社会人としてのキャリアについては、「杉並の実家」（p. 6）にいたころは、「元から司書になりたかったというわけではな」く、父が司法書士で、一人娘の自分もそうなるのだと子どもの頃から思っていた。「司法書士試験の合格を目指して学生時代から勉強を続けてきた」が、在学中は合格できず、「在学中にたまたま司書の資格を取っていた」ので「司書をやりながら合格を目指そうと考えた」。「昔から本は大好きで図書館ならそう忙しい仕事でもないだろうし勉強にうってつけの環境だろう——当時の私はその程度に安直に考えていた。司書はかりそめの仕事で、いつかは試験に合格するはずと信じていた」という。「新卒であるロー・ライブラリーに勤め」、「その契約が一年で切れて次の勤め先を探すも、結局法律と何の関係もない学校図書館に転職せざるを得なかった」。「試験に落ち続け、仕事と勉強の両立にもくたびれ始め」「これ以上続ける気力を失ってしまい、ついに受験を断念した」。「気持ちの整理がつかなくて」「これからずっと、図書館の司書として生きていく」のか、「常勤の職を得られるかどうかともわからず、もしかしたら生涯不安定な非正規職として……それを考えるとわたしの胸はやりきれない思いにつぶれそうになる」（pp. 8-10）ということで、当初から図書館に勤務することを意識していたわけではなく、「司書はかりそめの仕事」であり、司法書士を目指して、受験勉強を継続していた。大学卒業後は法律に関係のある「ロー・ライブラリー」に勤務したが、その後は、図書館の有期契約職員として、さまざまな図書館の現場を経験してきている。

### ◎花園小学校図書館

中島まふみが、四月一日に、新学期から勤務することになる花園小学校へ行くと、図書室主任で、四年生の担任の小此木という「四十近くに見える男性」が対応する。この学校では、「正規の教職員以外は職員会議に参加できない規定」になっている。中島まふみは「以前とある小学校で学校司書の仕事をしていたとき、わたしを曲がりなりにも司書だと認識してくれたのは図書担当の教諭ほか数名だけで、大半の先生はみな私のことを図書室勤務の事務員だとしか思っていなかった」。「職員会議にも出席の権限がなく、職員室に何か備品を取りに行きたくても会議中は入室すら許されなかった」。一年生の「図書の時間」で読み聞かせをやってみたいと提案したが、「パートさんは教育内容に口出ししないで」と言われたという経験もしていた。（pp. 19-20）

実際の学校現場での学校司書の活動状況には、多様なものがあるが、このストーリーでは、指導的な業務に学校司書をあまりかかわらせない、という方向性で運用されている設定の学校が描かれている。

蔵書カードや図書カードは、「かつてはこれで本を探し、本を借りるというシステム」

だったが、現在では「パソコン管理に切り替えられているらしい」。先生から長い時間をかけて「この図書室の概要、貸し出し業務、新着資料の受け入れ方法、子どもたちへの対応、各種授業とくに「図書の時間」との連携について……などなど」の業務に関する説明をうける。事務的なことについては、前任者が引き継ぎ資料を用意していた。(pp. 20-22)

### ◎区立図書館との連携

花園小学校の創立当時は、「東京の小学校の中で広さも蔵書数も最小の図書室だった」。「一九七〇年頃、ちょうど小学校の隣の敷地に建設予定だった区立図書館の花園分館を、花小図書室と通路でつないでみてはどうかという案が持ち上がり実現され」「昼休みと放課後に自由にこの通路を使って図書館と行き来することができた」。(p. 23)

隣接する区立図書館花園分館について、中島まふみは、通路が解放されていたなら…あの扉を開けて、あつという間に区立図書館へ行けるのにと考える。(p. 107) 彼女がこの小学校に在籍していた当時は、「お昼休みと放課後なら、花小の子は自由に行き来できた」という。「出入り口には大人の司書さんがいて、図書館へ行く時は名札を預けて」おく。「誰が図書館にいるかすぐわかる」し、「万が一変な人から声を掛けられないように名札は外そう」ということになっていた。(pp. 110-111) 2) その後、小学校に刃物を持った男が乱入した事件を機に、一般人が学校に入って来られるのは危険だと、通路が閉鎖され、現在も扉は閉ざされている。(p. 22) 3)

### ◎学校図書館での活動

#### ○「図書の時間」

四月十日にはガイダンスがあり、それは無事に乗り越えたが、翌週から「図書の時間」がはじまる。「国語の教科と連動して、一～二年生は週一回、三～四年生は隔週で授業時間に図書室を訪れて本を読むというもの」で、「これは授業の一環なので、全クラスの担任の先生と相談して毎回の準備をしなくてはならない」。図書室担当の小此木先生は、「基本的には先生方のお手伝いっていうスタンスで構わない」が「困ってる先生がいたらヘルプしてあげてほしい」。「教育の主体は教師」なので「先生方の求めに応じてお手伝いして頂くのは構わないけど、干渉は困る」「先生のやり方に意見したり批判したりする人がいますけど、そういうのは違うんじゃないですかね。教師は教師、司書は司書。お互いに……ね?」と言っている。中島まふみは、この小此木先生について、「決していい加減な人ではなかったけれども、とくに熱意のある先生というわけではなかった。事なかれ主義で、なにも問題を起こさず例年通り図書室を運営していくことを、いつも第一に考えているようだった」と感じていた。(p. 49)

#### ○夏休み前の準備と「三行朗読」

「七月の小学校の図書室は、夏休みに向けての準備で大忙しになる」。「読書感想文向きの本、自由研究や夏休みの宿題に役立ちそうな本、それらを幅広く準備しなくては

ならない」。(p. 107) 七月の半ば、一学期ももう終わりに近づくという頃、一年一組のクラスで「図書の日」に「三行朗読」が行われた。それぞれ自分の好きな本を選び、本の中から三行程度を目安に皆の前で朗読するというもので、「クラス全員が同じ教科書を持っている国語の授業と違い、図書館の本は一人に一冊しかない。クラス全員が朗読に参加できるようにするには……と、担任の先生と私が考案したアイデアだった」。

「実際にやらせてみると、なかなか面白い。選ぶ本も様々ながら、本の中からどの三行を抜き出してくるかにもその子の個性がよく表れている」というものだった。(p. 127)

#### ○ディスレクシアの児童への対応

絵本の朗読がうまくできない児童がいて、「臨床心理士でスクールカウンセラーの榎先生 (p. 45) に相談すると、「ディスレクシアの可能性もあるかもしれません」。「識字障害ですよ。一般的な知能には問題がないのに、文字の読み書きにだけ困難をきたすというものですよ。文字が歪む、滲む、反転する、踊っているように見え」「些細なことが気になって読むのに集中できない」。「一行分だけの穴が開いたシート型の読書補助器具や、色つきの眼鏡が欧米では使われていると聞きます」。「一度専門家の診断を受けるべきです。先生から親御さんにうまく伝わるといいのですがね」と言われる。

(pp. 129-131) この「一行分だけの穴が開いたシート型の読書補助器具」にあたるものを、ルリユール工房で、瀧子親方の孫で、親方と同じく製本家の由良子さんがつくってくれる。「窓の周りに可動式の枠があり、それを動かすと高さや幅を自由に調整できる」装置を使うことで、この児童は、ちゃんとした朗読ができるようになる。(pp. 140-144)

#### ○破損図書の補修

お昼休みの図書館で、一年生の男の子と女の子が、絵本『とべない鳥のしょくん!』をとりあっているうちに、本のページが破れてしまい、中島まふみは、担任の先生と小此木先生に連絡する。この小学校では「購入予算は限られ」ていて、「よほど貴重な資料でない限り再購入は不可」だと小此木先生は言う。(pp. 50-52) 中島まふみは、「どんな本でも修理してくれる魔法のお店を、私知ってるから」と言って、ルリユール工房へ持ち込み、瀧子親方に「本を針と糸で綴じ直し」てもらおう。(pp. 53-55)

#### ◎職業生活の展望

中島まふみは、お盆休みに実家にもどり、司法書士の受験をやめたことを両親に伝える。これからどうするつもりかと聞かれ、「司書の仕事で食べてくしかないんじゃない」と回答する。両親は、考え直すように言って、母親が、「司書の仕事って……。どこもここも非正規で一年契約ばかりなんじゃない？ 今年もよくても来年はどうするの？ そんな仕事、一生続けるような——」と発言する。それを聞いた中島まふみは、まだ実家に来たばかりだったが、引き止めようとする両親を無視して、シェアハウスに帰ってしまう。(pp. 132-135)

十二月二十四日、小学校の終業式の日、図書室担当の小此木先生から、来年度も「うちの学校としては引き続き中島さんにやってもらいたいと考えてるんですよ」と言われ、

引き受けると回答する。「また来年の春からも、この小学校の図書室で子どもたちのために働き続けることができる。今年はやりたくても叶わなかった様々な目標に、来年また挑戦することができる。私は嬉しくて、カウンターの上に置いてある古い回転式の図書カードケースを、誰も見ていない隙にくるくるとメリーゴーランドのように回した」。(pp. 206-207)

その後、暮れに実家に帰省し、来年の仕事について聞かれ、中島まふみは「花小でもう一年勤めることになった」と答える。「父と母は寂しげな顔をして黙りこくっている」。「お父さんの仕事を継ぐことができなくてごめんなさい」。「資格のことは諦めたけど、これからは司書を一生の仕事として頑張っていくことにしたので、どうか見守っていてください」と言ったが、何も言葉が返ってこない。二人とも呆然としている。「まあ、頑張りなさい。そう決めたんなら」と「父がやっと思え息まじりにつぶやいた」。(pp. 213-214)

中島まふみは、大学在学中から、司法書士を目指し、受験を続けてきたが、合格できないまま卒業し、そのあとも数年間にわたって、受験勉強を継続していた。その間に司書の資格を生かして、最初の年は法律と関係のある「ロー・ライブラリー」に勤務するが、その後は「非常勤の派遣司書として首都圏の図書館を転々としてきた」(p. 8)。そして、「司書はかりそめの仕事」と思っていたが、ついに司法書士の受験を諦め、この仕事を継続していくことを考え始める。とりあえず、次の年度については出身小学校の学校図書館で勤務することになったが、その先は見通せないままである。

中島まふみは、不本意就職といってもいいような、学校図書館での学校司書としての仕事についているが、製本工房の人たちとかかわりや、臨床心理士・スクールカウンセラーの榊先生、その他の関係者との交流で、今後のキャリアについて一定の意欲を感じられるようになっていく。ただ、将来的な職業の展望が見えているわけではなく、ストーリーの中で安易な正規職員への見通しが示されてはいない。両親との関係性についても、夏休みのお盆には、実家に行った際、母親に、司書の仕事は非正規で一年契約ばかりで、今年をよくても来年はどうするのか、と言われて、ほとんどコミュニケーションをとらずに帰ってしまう。年末には、次年度は出身小学校で学校司書としての勤務を継続することになって両親に「司書を一生の仕事として頑張っていくことにした」と言っているが、安定した継続的な雇用が保証されているわけでもなく、両親も、とりあえずは「頑張りなさい」と告げるしかない状況にある。今後、「図書館の司書として生きていく」のか、「常勤の職を得られるかどうかはわからず、もしかしたら生涯不安定な非正規職」のままかもしれないという、不安定な状態から脱出する方向が、本人にも、明確に見えているわけではない。

注)

1) 坂本葵『その本はまだリユールされていない』平凡社、2025. 3

著者の坂本葵は、本書の奥付で、「1983年愛知県生まれ。東京大学文学部卒業、同大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。大学の非常勤講師の傍ら執筆活動を始める」「本書が二作目の文芸作品となる」とされている。

2) 「学社融合」と称される学校と公共図書館との連携がはかられた施設は、さまざまな事例があるが、たとえば、下記の埼玉県志木市の施設は、その一例である。

志木市立いろは遊学図書館

[\(地域コミュニティに支えられた学社融合施設 | 学校施設整備・活用のための共創プラットフォーム CO-SHA Platform\)](#)

[\(志木小学校・いろは遊学図書館 | ホール/美術館/図書館 | 石本建築事務所\)](#)  
[\(siki1013.pdf\)](#)

なお、2026年に開設が予定されている阪急阪神不動産がてがけるマンション「ジオタワー十三」では、2階部分に、大阪市立図書館分館、学校図書館(学校法人・履正社)、まちライブラリー、の3者が、開設される予定であることが発表されている。

下記のジオタワー公式ページでは、多数の写真とともに、「2Fフロアイメージ図」が公開されている。

[\(建物 | 【公式】ジオタワー大阪十三\)](#)

3) 小学校への乱入事件としては、大阪教育大学附属池田小学校事件、などが知られている。

[\(別紙 「附属池田小学校事件の概要」 | 国立大学法人 大阪教育大学\)](#)

#### 4. 大学図書館の事例

##### 4-1. 『麦本三步の好きなもの 第三集』1)

大学図書館のスタッフとして勤務する「麦本三步」をメインとするストーリーで、単行本として、3冊目が刊行された。

「二十代後半」(p.9)である、この時点での状況については、「三步もこの春で大学図書館勤め四年目に突入。お仕事にもすっかり慣れ」「通常業務は基本滞りなく片づけられるようになった」ということで、一定の経験を積み重ねてきている。(p.23)一方で、「お世辞にもお給金の高い職種ではなかった」。「多くのスタッフが非正規雇用で、それは三步も例外ではない」。大学の先生が言っていた「図書館は図書館を好きな人だけで支えなければならないのが現状だ」というお言葉も伊達ではない、と説明されているように、図書館のスタッフの多くが非正規雇用で、条件もあまりよくないことが示唆されている。(p.173)

なお、関連業界である出版産業については、就職活動中の女子大学生が、「本にかかわる業界いいかなと思って、でも給料低そうだし、出版自体未来あんのかなって感じだし」と発言している場面がある。(p.31)

### ◎フリーペーパーの取材に対応

三歩がスタッフとして勤務する大学図書館が「地域のフリーペーパー編集部による密着取材」の対象となる。三歩が取材に対応して、図書館内や業務を案内しながら、動画をカメラで撮影し、「編集部が運営する YouTube チャンネルにアップする」という。フリーペーパーを出している会社の代表の娘さんがこの大学の学生で、「図書館に大変個人的かつ魅力的なスタッフさんがおられると聞き及び」三歩に取材をお願いすることになったという。(pp. 76-79)

閲覧室で「図書館の自由に関する宣言」を紹介するシーンを苦闘しながら撮影したり、(pp. 83-85)、「地下書庫の簡単な紹介も、噛み倒し散々だった」。(p. 95) 撮影の最終日に、「麦本三歩は確かに個性的で魅力的で愛されるのも納得なんだけれど」「今まで撮った素材だけを編集して公開するとどうにも見づらそう」で、「先方も図書館も望んだ結果を生まない」。「今日予定されていた紙面になるインタビューは後でちゃんとやる」ので「最後の動画撮影の方は、三歩以外の図書館スタッフ数名で行う」。「動画は三歩個人ではなく、あくまで図書館とスタッフ全体の空気感を紹介するという風なものにする」ことになったと職場の先輩から告げられ、三歩も「悔しいですが仕方ないと思います」とそれを了承する (pp. 102-104)

撮影が終了した後、三歩は、インタビューにこたえて、パーソナルな部分についても話をしている。「司書資格を取ろうと思ったきっかけ、実際に図書館で働き始めた理由、図書館スタッフであることの意義、楽しさ大変さ、主な利用者である大学生と比べて三歩の大学時代はどうだったのか、今の学生たちとの距離感をどう感じているか、まさに四年生達が進路を決めつつある時期だと思うが三歩自身の今後の展望は」などの質問に、自分の気持ちをちゃんと答えた。三歩は、「図書館という場所を守る人間の一人として責任感を持ちたい、いずれは正規雇用の職員となるための試験を受ける考えもある」として、人生にとって図書館とは何でしょうか、という質問には「毎日通える大切な場所なのは、間違いないです。本がたくさんあることもなんだけど」「頼もしい先輩後輩たちがいてくれますし」とこたえている。(pp. 107-108) 「動画とインタビュー記事は、図書館の紹介のためにとっても役立ちそうだった」という。(p. 111)

### ◎今後の展望 資格取得など

麦本三歩は、大学在学中には、図書館や書店など様々なバイトに精を出し、卒業時には、そこそこの貯金があった。その、お金が底を尽きそうになってきて、とある勉強とバイトを始める。(pp. 174-175) 三歩は、キャリアアップのために資格を取ろうと考え、いちばんに思いついたのは簿記で、次に行政書士を思いついた。「どんな資格の先に繋がる仕事でも自分が何か失敗をやらかした際の被害の甚大さが想像され」「ネットで色々と検索」して「様々な資格の存在を知る」。(p. 176) 一方、職場の先輩と話をしている時に、英語が苦手という高校生の家庭教師のバイトを紹介され、やってみることにした。三歩は、TOEIC で、九百二十五点をとったことがあり、「図書館に日本語話者で

はない利用者がやってきた時は筆談で意思疎通をはかれたことがあるし、図書取り寄せ申込書を学生が提出してきた際にはタイトルの綴り間違いを直してあげたりもしている」という。(pp. 179-180)

麦本三歩は「英語力を大学時代のピークにまで戻し、その上で英語を使える資格を取りたい」と考える。「狙っているのは、日商ビジネス英語検定」である。(p. 182) 三歩は、将来について「いずれは正規雇用の職員となる試験を受ける考えもある」と、フリーペーパーのインタビューでは言っているが、とりあえずは、英語力を生かせる資格として「日商ビジネス英語検定」を受験しようと考えている。

なお、本書の末尾では「これにて三歩の一人暮らし編、いったん、終了」(p. 380)と記されているが、次々ページ(ページ付けはなし)には「麦本三歩の日常は続く」とある。

## 注

1) 住野よる『麦本三歩の好きなもの 第三集』幻冬舎、2025

大学図書館のスタッフとして勤務する「麦本三歩」をメインとするストーリーで、単行本として、3冊目が刊行された。

## 5. おわりに

本誌の前号の論考で、『建築ジャーナル』2024年9月号に、「特集 図書館の自由」が掲載されたことを紹介しているが、2025年も、多くの写真とともに、特集に選んだテーマに関する記事を書いている雑誌で、図書館が扱われるケースがみられた。

「暮らし」はアートである、をキャッチフレーズにあらゆる事象を「芸術」という観点から検証し、表現する」という月刊誌『芸術新潮』2026年1月号では、「特集 のぞく、訪ねる、くつろぐ 愛でたい本棚」を掲載している。1) この特集で「訪ねる」のカテゴリーの記事では、「わざわざいきたい進化する図書館」「デジタル化によりその役割を大きく広げつつある図書館 図書館の『いま』をさぐってみよう」として、小千谷市ひと・まち・文化共創拠点ホントカ、みんなの森ぎふメディアコスモス、那須塩原市立図書館みるる、太田市美術館・図書館、石川県立図書館、を写真と解説で紹介している。また、「対談 平田晃久 染谷拓郎 図書館が映し出す本と人との関係」では、両者が関与した施設にもふれながら、建築的に注目すべき図書館に言及し、図書館建築の動向についてコメントしている。他に、国立国会図書館東京本館について、イラストと文章で紹介する記事も掲載されている。

「建築界の最新動向を提供」「建築界を取り巻く社会・経済動向から経営実務までの情報をお届けする建築の総合情報誌」『日経アーキテクチュア』No. 1298でも、図書館建築が特集されている。2) 冒頭の「図書館動向解説」では、「静かに本を読み、学習する場所だった図書館が変化している」とし「理由は大きく分けて2つ」で「高度成長期

に建設された図書館が建て替え時期を迎えたこと」と「急速に進む少子高齢化」をあげている。「自治体の財政は厳しい」が「老朽化した施設を統合する」「コンパクトシティを目指して施設を集約する」などの事業は「交付税措置を受けられる」ので「貴重な財源」での「施設再編」が進むとしている。

「図書館運営の自由度が高まるきっかけ」として指定管理者制度をあげ、PFIの事例として、桑名市、長崎市、の図書館を紹介している。また、CCCによる武雄市のケースを「多くの人が足を運び、話題となった」とし、さらにPPPの先進事例として、紫波町をあげ、塩尻市についても複合施設の成功事例として、紹介している。さらに、「専門家に聞く」として、図書館情報大学副学長、筑波大学附属図書館長などを歴任した、図書館建築の専門家でもある、植松貞夫：日本図書館協会理事長・筑波大学名誉教授、に対するインタビュー（p.31）も掲載されている。

「建築、インテリア、アートから、食、ファッションまでを主な領域とする「Life Design Magazine」です。」という月刊誌『Casa BRUTUS』No.299、では、「本に囲まれた空間に惹かれる理由とは。新しい時代の図書館と書店を特集！」と表紙に記載され、こちらでも、図書館建築が特集されている。3)表紙は、記事でも扱われている「石川県立図書館」の「4層吹き抜けのグレートホール」である。

特集の内容としては、大量の写真とともに、それぞれの記事で扱われている図書館の設計を担当した設計者のコメントが掲載されている。

01では、石川県立図書館が多数の写真によって紹介され、仙田満のコメントがある。仙田が関与した図書館として、これ以外に、和光大学ポプリホール鶴川、国際教養大学中嶋記念図書館、伊勢原市立図書館・子ども科学館、が紹介されている。また、石川県立図書館の500席以上の閲覧席の家具の選定デザインを担当した川上元美、のコメントもある。

02では、安藤忠雄が手がけ、日本各地に展開する「子ども本の森」の最新施設、子ども本の森熊本が写真で紹介され、安藤忠雄の子ども本の森プロジェクトに関するコメントを掲載している。また、中之島・遠野・神戸・松山、の同じ名称の施設と、こども図書館船「ほんのもり号」についても紹介している。

03では、「小千谷市ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。」について写真で紹介し、平田晃久のコメントを載せるとともに、平田が手がけた、「練馬区立美術館・貫井図書館」、「太田市美術館・図書館」についても紹介している。また、「佐川町立図書館さくと」を写真で紹介し、設計に関与した、イシバシナガラアーキテクト+森下大右設計の関係者のコメントを載せている。

04では、1964年に竣工した伊賀市の〈旧上野市庁舎〉を「図書館とホテル」にコンバージョンする工事が進んでいる」として状況を写真で紹介し、マル・アーキテクチュア関係者のコメントを載せている。さらに「MARU. architecture の設計で、2つの図書館が進行中」として、伊東市新図書館（静岡）、南国市図書館（高知）、をあげている。なお、「1.はじめに」で紹介したように、伊東市ではその後、市長選挙の結果な

どにより、今後の状況は不透明になっている。

05では、伊東豊雄が設計を手がけた、「茨木市文化・子育て複合施設おにくる」を紹介し、伊東豊雄がこれまで扱ってきた図書館建築とそれに対するコメントを掲載している。他の事例としては、「みんなの森ぎふメディアコスモス」、「せんだいメディアテーク」を紹介している。隈研吾については「子どもの頃から図書館によく通っていた」という冒頭のコメントに続けて、「梶原町立図書館（雲の上の図書館）」を紹介し、他の事例として「三条市図書館等複合施設「まちやま」」、「守山市立図書館」「TOYAMAキラリ」をあげている。

06では、ブックディレクターを名乗る幅允孝が、「未来の図書館の王道」を目指したとする「神奈川県立図書館本館」を紹介し、幅が、図書館に携わるきっかけとなった「札幌市図書・情報館」や、自邸兼図書室の「鈍考/喫茶芳」も紹介されている。

BOOK LOVERでは、『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』の著者である、文芸評論家・三宅香帆が、図書館とのかかわりについて、コメントしている。

NEXT LIBRARYでは、岡本真が、「複合化・融合化」「イノベーション」「開かれた場所」「未来をつくる図書館」「居場所」「アップデート」「図書館学の五原則」というキーワードで、「未来の図書館」について語っている。

07では、空間構成や運営コンセプトが特徴的な専門図書館が紹介されている。地中図書館については、本誌に掲載された論考でも、長濱ねるが、訪問したことについて、扱っている。

08では、公共図書館の事例として、「ミライオン図書館 長崎県立・大村市立一体型図書館」「須賀川市中央図書館（須賀川市民交流センターtette内）」「那須塩原市図書館 みるる」「さいたま市立大宮図書館」「本の森ちゅうおう 中央区立京橋図書館」「杉並区立中央図書館」「砺波市立砺波図書館」「小牧市中央図書館」「守山市立北部図書館 本の湖」「守口市立図書館」「なでしこ芸術文化センター 神戸市立西図書館」「和歌山市民図書館」「不知火美術館・図書館」「多摩市立中央図書館」が紹介されている。

このあとには、書店が建築的に特徴のある書店や、カフェと併設されている書店を紹介しているページが続いている。

この『Casa BRUTUS』では、大量の写真により、さまざまな図書館建築の事例を紹介し、あわせて、その設計に関与した多数の関係者のコメントを、掲載している。こうした趣旨の雑誌の近年の事例としては、充実した内容のものになっていると言えよう。

一方、文芸雑誌『小説現代』2025.8&9、では、大特集「最恐・真夏のホラー大凶宴！」を掲載している。4) 6つのテーマについて、それぞれ2作の短編が競作のかたちで発表されているが、そのうちのひとつが「図書館」で、背筋「笑う女が立っている」、平山夢明「そして家族全員、焼きそばス」が掲載されている。

背筋「笑う女が立っている」では、区立図書館について、「住宅街にほど近い、モダンな雰囲気の建物」で、「利用者は多くないものだと勝手に思っていた」。「平日の午

後三時にもかかわらず、多くの席が埋まっていた」。「学生時代によく足を運んだ地元の古い図書館はいつもガラガラだったので、「人目を避けてひっそりと過ごせるのではないかと期待していたが、都内ではそうもいかないらしい」。「来る者を平等に受け入れる静謐な空気。そして、そこに集う者たちも同様に、歓迎も拒否もしない」(p. 214)など、現代の都市部の図書館を思い起させるような状況が描かれている部分もある。

平山夢明「そして家族全員、焼きそばス」は、「那須町(栃木)」にある、とある企業の創業者の「個人蔵書を保管・閲覧する目的で1990年代に建設され」「一般公開はしていない」私設図書館が舞台となっている。(p. 232)

ホラー特集に掲載された作品であり、ストーリー展開は、現実の図書館状況とは距離のある内容となっているが、テーマのひとつとして、図書館が選択されているということは、図書館がホラー小説の舞台としてふさわしい場所であると、文芸誌の編集部が考えていることを示している。ちなみに、図書館以外のテーマは、「忌み地」「記憶」「深夜残業」「場末の映画館」「リミナルスペース」であった。

図書館建築では、実際に新しいコンセプトに基づく様々な建物が各地で建設されており、それについての特集雑誌が刊行されている例が相次いでいるということは、テーマとしての「図書館建築」が、社会的に一定の注目を集めていると言えるのではないか。一方、今回取り上げた小説作品で、『図書館に火をつけたら』では、行政とのつながりが深い新任の図書館長が、やや強引に新築の図書館への移行を進めたことで、職員などの反発を招いたことが描かれており、『まるみかん大一番』では、図書館の廃止・統合政策と、それに対する反対運動がテーマとして選択されている。

非正規雇用については、たとえば今回取り上げた作品の中で、非正規職員が扱われているケースは、

●『図書館に火をつけたら』

加賀美：七川市立図書館の非正規職員・司書資格あり・利用者には受け入れられている・管理職からは批判される・図書館が新設され移転することに反発・新館長の方針に不満・図書館に火をつける

羽場博之：図書館に非正規職員として勤務・待遇の悪さが家庭の不和を招く・離婚して親権もとられ絶望・友人に七川市立図書館へのあっせんを依頼するが不調に終わる・ホームレス状態に・七川市立図書館の書庫に滞在・火災に巻き込まれ死亡

●『まるみかん大一番』

エレナさん：ブラジル出身・図書館でアルバイト・閉館反対運動に共感・児童集会で閉館反対の発言

●『その本はまだリユールされていない』

中島まふみ：司法書士を目指す・大学在学中に試験に合格できず・ローライブラリーに勤務・非正規職員として複数の図書館に勤務・司法書士の受験勉強の継続から脱落・学校司書として出身小学校に勤務・司法書士の受験をやめたことで両親と衝突・学校司書

としての活動に前向きに・次の年も非正規の司書を継続する方向・両親と和解

●『麦本三步の好きなもの 第三集』

麦本三步：大学図書館の契約職員・四年めで職場での対応にも慣れてきた・正規職員を目指すことも意識する・将来を考えて資格の取得を目指してwebで調べる・英語力を生かして日商ビジネス英語検定の受験をめざす

といった事例があり、いずれの作品でも、図書館の非正規職員として、勤務を継続していくことだけでは、将来的に明るい展望は持ちにくいストーリーになっている。職員のキャリアについては、公共図書館以外の館種についても、図書館への就職を当初から目指していたわけではない女性が学校図書館に勤務している（『その本はまだリユールされていない』）、大学図書館でも非正規雇用が多い（『麦本三步の好きなもの 第三集』）、などの状況が描かれている。図書館が非正規雇用の多い職場であることは、すでに2000年代に入った時期から、現実になっていたが、いまやそうしたことがフィクションのストーリーにもあたりまえのように登場するようになっている。

一方、文芸誌でも図書館がテーマの短編が掲載されているが、ホラー特集ということで、現実の図書館とは距離のある内容が展開されている。新たな図書館施設が建築されていく一方では、ホラー小説の舞台となりうる図書館のイメージも残存しているということか。

さらに、図書館の廃止・統合、新設図書館に対する反発などがストーリーに取り入れられた事例も出現するようになっている。フィクションに登場する図書館も、現実の図書館を巡る状況の変化を受けて、多様化してきており、2025年にもそれを反映したさまざまな作品が発表されている。そうした動向について、いましばらくの間、継続して、検討の対象としていくことを考えている。

注

1) 「特集 のぞく、訪ねる、くつろぐ 愛でたい本棚」『芸術新潮』2026.1、pp.14-73

この特集の中で「訪ねる」のカテゴリーの記事では、「わざわざいきたい進化する図書館」として「デジタル化によりその役割を大きく広げつつある図書館の『いま』をさぐってみよう」と、小千谷市ひと・まち・文化共創拠点ホントカ、みんなの森ぎふメディアコスモス、那須塩原市立図書館みるる、太田市美術館・図書館、石川県立図書館、について写真とともに紹介している。(pp.42-45) また、「対談 平田晃久 染谷拓郎 ルネサンスから現代まで図書館が映し出す本と人の関係」では、ラウレンツィアーナ図書館（メディチ家の私設図書館）、フランス国立美術史研究所附属図書館（ラブルストの間）、太田市美術館・図書館、小千谷市ひと・まち・文化共創拠点ホントカ、海南nobinos、みんなの森ぎふメディアコスモス、DOKK1（ドックワン・デンマークの図書館）、那須塩原市立図書館みるる、石川県立図書館、子ども本の森中之島、などについてコメントしている。(pp.42-51) さらに、宮沢洋「日本最大の巨大書庫へ！ 国立国会図書館東京本館巡礼記」では、イラストと解説文で国立国会図書館東京本館を

紹介している。(pp. 52-55)

「訪ねる」の前後のページで、「のぞく」の 카테고리では、おもに個人の本棚を紹介し、「くつろぐ」では、ブックホテル、ブックカフェ、書店、などに設置された、特徴のある本棚について、写真とともに解説している。

2) 『日経アーキテクチュア』 No. 1298、2025. 10. 23

「公共建築特集 にぎわう図書館 子どもも大人も滞在したくなる『居場所』に」 pp. 26-27

「図書館動向解説 公共図書館が都市戦略の要に 地域の拠点として存在感増す」 pp. 28-31

「神戸市『神戸市垂水図書館』 駅前広場と連続させて人を呼ぶ 神戸市の新垂水図書館が開業」 pp. 32-35

「インタビュー① 藤原徹平氏、島田陽氏 分断した市民社会を『混ぜる』 様々な目的で訪れる図書館に」 pp. 36-37

「群馬県大田市『エアリススペース』 1万5000冊の漫画を中核に スロープで回遊できる新図書館」 pp. 38-41

「インタビュー② 平田晃久氏 図書館設計の新鋭が読む潮流 人と街と知識の“結び目”をつくる」 pp. 42-43

「図書館設計の勘所 複合から融合への転換期 図書館設計で求められる新機軸」 pp. 44-45

「デジタル化の波 拡大する情報空間との『接点』 サイネージやカードで誘導」 pp. 46-47

「識者インタビュー 岡本真氏、谷一文子氏 地域ごとに進化を遂げる図書館 館内ショップや移動車の挑戦も」 pp. 48-49

3) 『Casa BRUTUS』 No. 299、2025. 3

「美しい本の森へ」 pp. 26-27

「LIBRARY 01 BEST LIBRARY 石川県立図書館 来館者は日本一。円形劇場のような図書館へ。」 pp. 28-37

「LIBRARY 02 CHILDREN'S BOOK FOREST 安藤忠雄さん、子ども本の森をなぜ、作り続けるのですか。子ども本の森 熊本 etc」 pp. 38-43

「LIBRARY 03 BRAND NEW 旅のDESTINATIONにしたい、話題の最新図書館へ。 小千谷市ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。 by 平田晃久、佐川町立図書館さくと by イシバシナガラアーキテクト+森下大右」 pp. 44-53

「LIBRARY 04 MODERNISM 坂倉準三のモダニズム庁舎が図書館+ホテルに。伊賀市旧上野庁舎改修計画 by IMARU. architecture」 pp. 54-57

「LIBRARY 05 ARCHITECT 巨匠建築家が考える。理想の図書館の作り方。伊東豊雄/茨木市文化・子育て複合施設おにくる etc, 隈健吾/梶原町立図書館(雲の上の図書館) etc,」 pp. 58-65

「LIBRARY 06 BOOK DIRECTOR 幅允孝が考える新しい図書館とは？ 神奈川県立図書館本館/札幌市図書・情報館/鈍考」 pp. 66-69

「BOOK LOVER 三宅香帆の働きながら本を読む方法。」 pp. 70-71

「NEXT LIBRARY 5分くらいでわかる“未来の図書館”」 pp. 72-75

「LIBRARY 07 SPECIALITY 特別な空間とアーカイブを楽しむ専門図書館。地中図書館/角川武蔵野ミュージアム/魔法の文学館/まちライブラリー/早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）」 pp. 76-79

「LIBRARY 08 PUBLIC LIBRARY GUIDE 新たな居場所をつくる開かれた公共図書館。」 pp. 80-87

このあとのページでは、建築的に特徴のある書店や、カフェと併設されている書店を紹介している。

4) 「最恐 真夏のホラー大凶宴！」『小説現代』2025. 8&9

「最恐対談 平山夢明×背筋 僕はあなたを読んでホラー作家になった」 pp. 8-9（写真）、 pp. 296-303（対談）

この対談を掲載しているページでは、平山夢明「1961年、神奈川県生まれ」「2006年、短編『独白するユニバーサル横メルカトル』で、第59回日本推理作家協会賞短編部門を受賞」（p. 300）、背筋「2023年、小説投稿サイト『カクヨム』に発表した『近畿地区のある場所について』が SNS 上で話題を呼ぶ。同年8月に書籍化されて大ヒット」（p. 301）、などと紹介されている。

なお、掲載された対談では、図書館については、とくにふれていない。

両者の作品は、以下のもの。

背筋「笑う女が立っている」 pp. 213-222

平山夢明「そして家族全員、焼きそばス」 pp. 223-232

本文中で示したwebページ（      ）は、2026年1月の時点で公開されていたものです。